

「けしからんっ！！ 実に、けしからんっ！！」

朝っぱらから、石井長官が怒鳴っている。見ると、彼は私(えみし作者)の、命の次に大事なスマートフォンを握りしめ、

「あ…『悪魔執事と黒い猫』なんて、ふしだらなノベルゲームに、うつつを抜かしてるうちの作者に、今度こそ鉄拳制裁喰らわしてやる！！」

本人が立ち聞きしているのも知らないで、アホの石井はブチ切れていた。

やべーと思った私は、速攻でヘルメットを装着してから、石井の背中に小石を投げた。

「あいたっ！！」

想定通り、大げさな声を上げて石井が振り返る。

「やいっ、貴様…」

ただでさえ切れやすいキャラが、怒髪天でこちらに向かい、およそ68キロあるBBAの左肩を、デカイ左手で掴んだ。

「大人しく創作活動していればいいものを、よくも、こんなにイケメンの多いゲームなんかに、うつつを抜かしおって…可愛い由真が、悪影響を受けたら、どう責任を取るつもりだ！？」

ぶんぶんぶん…前後左右に私を揺らす。

「あわわわ…作者を虐待するな！！」

「うるさーいっ！！」

…めんどくさいけど説明しよう。

悪魔執事と黒い猫とは、最近、作者がハマったノベルゲーム。総勢19人のイケメン執事たちが織りなす、壮大なダークファンタジーノベルでありながら、ユーザーの癒しもしてくれるすごいゲームでもある。作者は、今年の6月に始めたばかり…

「ええいっ、貴様の行動をスパイさせた報告書によれば、朝、昼、晩もスマホを離さずに、ゲームの世界に浸っているそうだな？で、一人暮らしの部屋は荒れ放題で、洗濯物も畳んでないし、掃除も食事も疎かじゃないか！？そんなことで、この暑い夏を乗り切れるかーっ！！」

至極真つ当なことを言うキャラに、ヘラヘラ笑って反論する私。

「いやん、だってロノくんが可愛いもんっ！！専属執事のいる世界に入り浸って、何が悪い！？」

「貴様につられて、由真がゲームをインストールしたら、私が彼女から捨てられるだろうっ！！」

「本人がインストールしてから言いやがれ！！」

「私の由真の人生には、ベリアンも、ロノも、バステインも、ボスキも、アモンも、ミヤジも、ルカスも、ラトも、フルーレも、ラムリも、フェネスも、ナックも、ハウレスも、テディも、ハナマルも、ユーハンも、ベレンも、シロも、要らないっつーの！！」

「いつの間に執事たち全員の名前を覚えた！？」

「どいつもこいつも、顔面偏差値が高すぎるんだ、コノヤロー！！」

嫉妬にかられてブチ切れる石井。実に実に、見苦しい…

「そうでなくても、私は妖魔退治以外に取り柄がないというのに！！こんなイケメン連中に、至れり尽くせりされた日には、由真の心もふわふわになって、『19人の執事の皆さま方♥素敵♥』ってなるだろうが！！」

頭に血が上った架空の人物から、マジで片手で首を絞められる三次元人・くまそえみし。

つか、こんな二・五次元は、いやだなあ…

「く…くるちい…」

石井の身長は180cm。それに対して、私は157cmしかない。だから、自然と足が地面から離れてしまう。

「ええい、泣いてやるう！！」

左腕だけで68キロを持ち上げる石井。

「わた…わた…私が…泣きたい…」

ジタバタ暴れても、足が届かない。届かないから、私の首に石井の指が食い込んで…ちぬ？

「待ってください！！石井さま！！」

ここで、小天使・由真ちゃん登場！！

「由真！？」

ストン！！…ドシャ！！（作者の落ちる音）

「あいてて…いきなり手を離すか！？…まあ、助かったけど…」

殺作者未遂に目をつぶり、由真は、石井に抱きついた。

「大丈夫ですよ、石井さま。私の辞書に『浮気』の二文字はありません。」

「しかし…渡る世間はドーミョージばかりでは??」

4にかけた私を無視して、石井は困惑した顔をして由真を見た。

「イケメンは間に合っています♥私の大事なダーリンは、あなただけですよ♥石井さま♥」

「由真…」

「あなたがヤキモチ焼くから、イケメンの出るスマホゲームは、インストールいたしません。今まで、これからも♥」

「…」

「だから、えみしさんにスマホを返してください。お願いします。」

「…しょうがないなあ、由真ちゃんは…」

とかなんとか言いながら、石井は投げるようにスマホを返却した。もちろん、アンインストールはしていない。

「リア充な私たちと違って、えみしさんには推しゲームしかないのです。だから、老後の楽しみを奪わないで…」

「それもそうだな。」

ラブリア充カップルのトンデモ発言に、私は眉をしかめた。

「…あの、何気に失礼だな？」

「だって事実でしょう？」

「……」

由真は目をそらさずに言い切った。

「カレシカノジョが居ないからこそ、スマホの専属執事さんに入れ上げるのでしょうか？」

「うっ…」

私は、石井から返却されたスマホを握りしめ、現実逃避の猪突猛進を、ぶちかますのであった。

「うえ～ん！！由真が意地悪言う～！！ロノくん、慰めてええええっ！！」

「ああっ、待て！！えみしの卑怯者！！」

真面目な石井が止めるのも聞かず、私は真夏のクソ暑い海岸めがけて、スーパーダッシュで走り出すのであった。

このお話に、意味なんてない…